

【FD・SD ニュースレター】

2022 No.3

2023年
4月発行

FD・SD News Letter

教育研究推進センター長 ご挨拶

皆様方におかれましては、日頃より教育研究推進センターの活動にご理解・ご協力頂き、誠にありがとうございます。

2008年に大学設置基準上「FDの義務」が制度化され、2017年4月からは「SDの義務化」がなされて以降、各大学で広く取り組まれるようになり、ほぼ10年あまりが経つこととなります。

その間、FDとSDの活動に関する研究が数多くなされています。その中でも、FD・SDの取り組みを行っていない教育機関では、教育力や教育サービスの低下が生じ、さらには大学経営に関する問題に繋がるとの報告がなされています(岩崎、2007)。また、FD・SDの取り組みを行っているとしても、形式的かつ不十分な実施であれば、教育効果はほとんど期待できません(岩崎、2007)。このことは、FD・SDを行っている教育機関でも継続的なテーマや内容の見直しが必要であることを示しています。

さらに、近年SDGs社会を実現するために、SR(Social Responsibility; 社会的責任)への関心が高まっています。大学におけるSRは、USR(University Social Responsibility; 大学の社会的責任)と呼ばれ、「大学が教育研究等を通じて建学の精神等を実現していくために、社会の要請や課題等に柔軟に応え、その結果を社会に説明・還元できる経営組織を構築し、教職員がその諸活動において適正な大学運営を行なうこと」と定義されています(富岡・田中・大野、2020)。USRの考え方をを持った教職員の場合、職務への意識が高まり、効率性を重視する雰囲気の醸成がなされています(富岡・田中・大野、2020)。この考え方を参考に当センターとしても、FDとSDの活動を向上して参りたいと考えております。



教育研究推進センター長 石原 俊一

皆様方におかれましては、教育研究推進センターの活動にご協力頂くことが多々あるかとは存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

引用文献:

岩崎保道(2007). FD・SD 未取り組み校の課題—教育力の向上及び経営破綻防止の視点より—. 高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習—, 15, 75-88.

富岡直美・田中智子・大野宏之 (2020). USRへの意識を高めるためのFD・SD—教職協働初任者研修の実践とその評価—. 日本教育工学会論文誌, DOI: 10.15077/jjet.44066.

授業アンケートの活用

教育学部

2021年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

① 2021年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

4つの設問の結果に対し、以下の考察・意見が出された。

Q5.この授業のために、平均すると授業1回あたりどの程度授業時間外に学修しましたか。

大学全体と教育学部と比較すると、大学全体よりやや授業外学修時間が少ない。

30分程度34.0%(30.9%)、0時間10.5%(9.7%)の項目が大学全体よりも高くなっている。

教育学部の学年別に見ると、1～3年生は「30分程度」「1時間程度」の回答数が多いが、4年生のみ2時間以上の回答が24.3%(他学年は1割程度)と多めになっている。

3年生は特に「1時間程度」「30分程度」への回答が他学年に比べ回答率が高く、「2時間以上」が9.1%と最も低い。履修科目数や各科目の課題提出などで時間外学修時間を分散せざるを得ないことが伺える。授業外学修が「0時間」も、2.3年生は1割以上。科目の目的や性質、学生の興味関心にもよるが、「30分程度」と合わせると4年生以外は4割を超え、特に2年生は47.8%と5割に迫る数値である。

2年生からは新課程であり履修科目数はこれまでの同学年に比べ少ないが、授業外時間を充分学修に活用しているとは言い切れない学生が一定数存在することが伺え、今年度の学修状況を注視して行きたい。

Q6.この授業での学修に意欲的に取り組みましたか。

大学全体に比べて数値は高い。特に「非常に取り組んだ」は5割を超えている。

「やや取り組んだ」と合わせると9割に迫る。「どちらともいえない」「あまり取り組まなかった」「まったく取り組まなかった」が1割程度。1年生がやや多い。大学での学修継続や進路に関連するところではあるので、学生の様子を注視する必要がある。

Q7.この授業の内容の理解を深めるために、主体的に行ったことはありますか。(複数回答可)

学部全体としては、「パソコンやスマートフォンなどのICTを利用して調べ」が46.7%で最も多い。これは大学全体と同率である。次いで「友人と協力しながら」が41.5%(大学全体30.9%)で、教育学部らしさが表れている。3番目が「予習・復習や関連する活動に取り組んだ」39.9%、4番目が「教科書以外の関連書籍や論文を読んで」21.8%、5番目が「図書館やコンピュータ教室等の大学の施設を利用」12.6%。1年生は5.9%と顕著に低い。4年生のみ、「予習・復習」が最下位になっており、「図書館やコンピュータ教室等」「教科書以外の関連書籍」の回答率に近くなっている。授業数が少なく、卒業論文に向けての動きと推測される。これらのことから、特に初年次からの図書館等の施設利用促進に向けた検討が必要と考えられる。

ICT利用は2年生51.4%、4年生61.4%と高い数値を示している。(1年生39.7%、3年生47.7%)4年生は卒業研究にICTを多く活用したことが推測される。

Q18.この授業で、知識・スキルがどの程度得られましたか。

大学全体に比べて、若干数値は高い。平均が4.4(4.3)、特に「非常に得られた」は50.3%(43.0%)。多くの科目において、知識・スキルを伝える努力が成果を上げていることが伺える。「あまり得られなかった」「得られなかった」が2.3%。科目の特性もあるが、1.2の回答が多く見られる授業は、更なる工夫が必要かと考えられる。

②次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

特にQ7.において「図書館やコンピュータ教室等の大学の施設を利用して学修した」という回答の選択率が特別に低かった。その原因の究明、また図書館利用促進に向けて、学部全体での積極的な検討が課題である。

授業アンケートの活用

人間科学部

2021年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

① 2021年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

司会進行は高尾教育研究推進センター主任が担当した。事前にアンケート結果を見てFD活動に臨むことになっていたが、5分弱を使い高尾主任が結果の特徴点を紹介した。

その後、Q5とQ7を中心に意見交換を行った結果以下の意見が出された。

(1)全体を通して

- ① 単年度の結果だけでは、比較の対象がなく検討することが難しい。
- ② 何を検討するのかがわかりにくい。

(2)Q5について

- ① コロナ禍以前の学生たちより学修時間をとっているように思われる。
- ② 学生の満足度は高いが学生の学修時間は少ない。
- ③ 昨年度はオンライン特にオンデマンド授業で課題が増えていたことに対する問題も指摘された。これに対するリバウンドで減っている可能性もある。

(3)Q7について

- ① 「パソコンやスマートホンなどICTを利用して調べ学修した。」の比率が高いこと(47.9%)について、wikipediaなどの情報を安易に利用しているので、「人間科学の基礎」などの授業でICTの利用について指導をより深めるべきである。
- ② 「図書館やコンピュータ教室等の大学施設を利用して学修した。」が13.2%は少ないように思われる。
- ③ ②については、現在より制約の多い状況だったことが関係しているのではないかとの意見が出された。

②次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

3-(1)①で指摘があったように、検討するための資料が不足しているとの意見が出されたこともあり十分な検討が行えなかったが、ICTの安易な利用(信憑性に疑問があるサイト利用やコピー&ペースト等)についてICTの利用について厳格さが求められることを「人間科学の基礎」などの科目を通じて学生に適確に伝えることが求められる。

文学部

2021年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

① 2021年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

宮武文学部長の挨拶の後、まず、教育研究推進センター野村教育推進部門主任(司会)より「2020年度秋学期授業アンケート結果について」の説明があった。論点は多岐に亘ったが、説明は以下の通りである。

- 授業のために、どの程度授業時間外に学修したかについて、「1時間程度～2時間以上」の合計が全体の3分の2弱を占める。しかし、「0時間～1.0時間」も3分の1以上いることにも留意すべきであり、今後、教員の指導、対策等が必要であると思われる。(あるいは、教員が予習を求めている授業も一定数あると考えられる。)
- 授業での学修に意欲的に取り組んだかについては、「非常に取り組んだ」及び「やや取り組んだ」の合計が87%に及び、文学部学生は概して熱心に取り組んでいると言

える。しかし、「どちらともいえない」、「あまり取り組まなかった」及び「まったく取り組まなかった」の合計も13%となり、これらの学生への指導、授業構成の改善などが今後の課題である。

- 授業の内容の理解を深めるために、主体的に行ったこととして(複数回答可)、「予習・復習や関連する活動に取り組んだ」が45%で、文学部学生は予習・復習によく取り組んでいると言える。「教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修した」は文学部の主体的な学びとして大切であるが、26.5%であり、2020年度と比して、若干下がっていると思われる。「パソコンやスマートフォンなどのICTを利用して調べ学修をした」のICTを利用した学びは45.3%であるが、対面授業に戻り、下がっていると考えられる(オンライン授業が実施されていた2020年度は70%台であった)。「友人と協力しながら学修した」につい

授業アンケートの活用

て、コロナ禍の2020年度は40%台だったが、31.9%になったのは意外な結果であろうか。

- コロナ禍の時期は情報が直接、得られないために、オンライン等を利用して友人と協力していた学生が多かったと考えられる。
- 授業で知識・スキルがどの程度得られたかについて、「非常に得られた」及び「やや得られた」が87.4%となり、文学部学生は知識・スキルが概ね得られたと考えていると結論できる。2020年度の結果よりも上昇していることも望ましい傾向である。対面授業に戻った結果だと考えたいところである。
- 上記2問についてはコロナ禍のオンライン授業と対面授業の差異が反映されていると考えられる。

以上、野村主任の説明の後、豊口センター次長より今回のFD活動の趣旨が説明され、文学部構成員による質疑応答、意見交換に移った。主な意見は以下の通りである。

- 対面授業をなくさないことが大切だが、ICTスキルが少し下がった。パソコンを活用していても、新聞、論文、その他、何をを読んでいるのかわからない。インターネットの正しい知識、使い方を増やしてほしい。昨年の方が主体性が高かったことが若干気になる。他人に手伝わってもらうことは悪くないが、自分自身で努力することが大切。
- 2020年度の学生のICTスキルは2021より上回っていたが、この結果だけではどのような知識が下がったか、上がったかははっきりとしない。つまり、今年度のICTスキルが下がったとしても、学生の学びの実態について具体的に何とも言えない。ICTスキルの「質」がわからなければ、今後どう対応すべきか考慮しづらい。
- せっかくデータベースに恵まれているのに、キーワードの活用が苦手。英語を使ってやっていない、母語ばかり使いたがる点が非常に残念(英文科教員)。
- 他大学の話だが、紙のアンケートを実施していた際はその内容について学生とディスカッションをしていた。
- 本当にこんなに学修しているのであろうか。また、単に学修時間が長ければよいということではない。学修方法の改善も必要だと思われる。
- 授業の中で教員が「こういうことを調べたいのならこ

うキーワードを調べるとよい」ということを伝えるとよいと思う。

Googleは曖昧な結果にならないよう、きちとした検索語が必要。練習しないとできない。

- 自分が担当しているのは予習を前提としていない講義形式の科目であり、予習段階で多くのことを期待しているわけではなく、新しい気づきをしてほしいと思い、授業をしている。
- アンケートを回答している学生が悪意を持ってコメントをしている場合もあり、必ずしもアンケート結果を参考にしていない。
- 他大の非常勤先では改善報告を書いたりすることもあるが、アンケートは長期欠席をした学生がたまたま回答するような場合もあり、一概によいとは言えない。
- 授業アンケートは学部の特徴として整理するのによい。みんなの意見が共有できる。
- 元々のアンケート全体では23項目ぐらいの質問事項がある。例えば、個々の科目の評価やスキルの修得などであるが、その中で、「この授業で良かったこと」の項目では、総じて説明のわかりやすさなどは満足度の平均点が比較的高く、改善を求める割合は1割以下であった。しかし、板書やプロジェクターの使い方については満足とするものと改善を求めるものとの差が少ない。この原因と対応について学部として考える必要があるのではないか。

②次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

今回のFD活動では、協議する項目を絞り、学生の声、深い学びをしているか及び学習行動と呼ばれるものなど、学部で現状を共有し学部での対応・改善に繋がる項目を取り上げた。オンラインによるアンケート実施は回収率が低く、その結果は実態を十分に反映しているとはいえないのではないかという意見も散見されるが、ICTを介した学修活動・学生生活に慣れている学生数が増加してきたことも事実であり、回収率を上げる工夫を講じながら今後も継続することとなる。上記で出された意見はいずれも有益な意見であり、それらも踏まえ、アフターコロナの大学教育では対面授業とオンライン授業の両方のよさを生かした授業運営が求められる。学生が文学部でいい学びをしたと思えるような授業作

授業アンケートの活用

りの努力を各教員に期待したい。

情報学部

2021年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

① 2021年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

情報学部では点検評価委員会の指示通り、学科会議および教授会を内部質保証推進会議と位置付けている。毎月の学科会議においては、通常の報告や連絡事項に加え、教授内容や指導方法等に係る意見交換等に係るFD活動を各学科判断で実施している。教授会には学科会議報告とともに、実施内容を報告することとしている。その背景から、7/20の研修会に先立ち、7/13に各学科会議においてアンケート結果を提示の上で議論を行った。併せて追加意見を募り、研修会では学科長より報告の上、全体討議を実施した。重点項目を中心とした意見は次の通り。

Q5(授業外の学修時間)について

- ・ 情報学部の授業1回あたりの授業時間外の学修時間が全体より長いことが意外。
- ・ オンデマンド授業で、授業時間内の学修と授業時間外の学修を区別できているか心配。
- ・ 授業時間外の学修時間が長い傾向にある。演習などが影響している可能性がある。
- ・ 制作系の科目(スタジオや画像編集ソフトやDTPを用いるような)では授業時間外に多くの時間を費やす必要があること。

Q6(意欲的に取り組む程度)について

- ・ 全体でも学部でも4以上の回答者が8割を越えていることから全体、学部双方ともおおむね意欲的に取り組んでいたものと考える。

Q7(主体的に行ったこと)について

- ・ ICTの利用が多かった。
- ・ 学部の特性と合致しているものの、どの程度のことを調べているのかが気になる(単に検索をするだけなのか、専門的な内容を含むようなwebサイトを閲覧しているのか)。
- ・ 2(図書館、PC教室の施設)や4(教科書以外の関連書籍や文献)のような、より信頼のおける文献に触れる機会をより増やしたいという感想。
- ・ 関連書籍や文献を読むことが全体よりも低くなかったこ

とが意外であった。ただし大学全体として低調であるようなので、もう少し書籍や文献を読んで学修できるような工夫が必要なのかもしれない。

- ・ PC教室で課題を行っている中で一緒に作業をする仲間を見つけることができ、また、学習の良いサイクルができたという事例が報告された。このように、学習に取り組める「場所」がキャンパスにあるということは、よい効果をもたらしていると思われる。

Q18(知識、スキルの獲得の程度)について

- ・ 全体と大体同じ。
- ・ あまり得られていない、まったく得られていないと回答した5.1%の学生(全体は3.4%)の学生は、より向学心があり、レベルの高い内容を扱って欲しいという意味であることに期待したいが、こういった意味で知識やスキルが得られなかったのか、確認してみたいと考えた。

その他

- ・ 学部別の集計であるので学科としての特性はわかりづらい。
- ・ 全体で科目数を分母にして平均を取るというのも、意味があるのかとか、単位数で重みづけをすべきなのではないか。
- ・ オンライン授業について: コロナ禍収束後も、座学系の科目や大教室授業になるもの等は、オンライン授業を選択肢として残したほうがよい。

各学科からの研修会提出書面(参考資料)は次の通り。学科によっては、共有ファイルを会議中に参加者が直接編集している。文体等に統一性が欠けるのは、係る事情により複数執筆者が同時執筆しているためであり容赦願いたい。

【情報システム学科】

- ・ 学部別の集計であるので学科としての特性はわかりづらい。
- ・ Q5では、授業時間外の学修時間が長い傾向にある。演習などが影響している可能性がある。
- ・ Q5からは単位の実質化が有効に機能していると思わ

授業アンケートの活用

れる。

- Q6から意欲的に取り組んだかというところは差がない。
- 主観評価と客観評価の課題がある。自己評価だけではわからない。
- Q7からアクティブラーニング的な展開が行われており、ICTを利活用した調べ学習が必要となる取り組みが進められている。
- Q13でも主体的取り組みの傾向が見られ、Q22の満足度も高い。
- アンケートで何を求めるつもりなのか、また、それに相応しい設問となっているのかが気になってます。
- 全体で科目数を分母にして平均を取るというのも、意味があるのかとか、単位数で重みづけをすべきなのではないか。
- Q5について、これも半年2単位の科目なのか、体育のように時間外学習が想定されていない科目なのか、など、それがまぜこぜで平均されているというのも気になります。45時間1単位を気にするのであれば、半期の1コマの科目で2単位か、4単位かでも選択肢が異なるべきかと思う。
- Q13について、設問が「主体的に考える場面や、協働的に活動する場面」となっています。「主体的には考えるけど、協働的には活動しなかった」という場合は、数学的にはYesになりますが、日常用語的には回答の選択肢なしということになり、いい設問ではありません。
- Q12も同様に、「明瞭だけど聞き取り難い」といった場合に回答に困ります。
- Q20も興味は得られたが、意欲は湧かなかった場合は困る。
- 重点項目というのもよいが、全体的にありそうなモデルを想定して、統計的に5%以上ずれているものを機械的に検出して…などはどうでしょうか。もちろん、これをやるためには、まず、設問をしっかりと作り直す必要があるとは思っています。
- 回答も全体の1/4程度ですが、これがランダム抽出ならいいですけど、そうでないと回答に意欲的な学生については・・・というバイアスのかかったデータになっているので、そもそもアンケートのやりかたについても疑問が残

ります。

- 授業アンケートをやるならきちんとやるべきだと思うので、アンケートの専門家ではない教員が片手間でやるのではなく、外注(専門業者に委託するなど)することを提案していきたい。

【情報社会学科】

Q5(授業外の学修時間)について

- 情報学部の授業1回あたりの授業時間外の学修時間が全体より長いことが意外であった。若干心配であるのは、オンデマンド授業で、授業時間内の学修と授業時間外の学修を区別できているかという点である。本来授業時間内の活動を授業時間外の活動と認識していることがないだろうか。
- 演習科目については、技術修得を見込んだ上での課題を出していることから、「1時間以上」の授業外での学修が必要な科目があるのではないかと考える。授業時間外での学修に十分に取り組んだ学生とそうでない学生では、15回の授業を通じて、大きな差が生まれていることが実感できる。

Q6(意欲的に取り組む程度)について

- 授業時間外の学修時間の回答の平均値は全体より情報学部の方が大きいことに対して、意欲を問うたQ6の平均値は平均より低かったが、全体でも学部でも4以上の回答者が8割を越えていることから全体、学部双方ともおおむね意欲的に取り組んでいたものと考えられる。

Q7(主体的に行ったこと)について

- PCを利用した文献の検索は授業で説明していることであるため、この割合が全体より大きな値になった可能性がある。ただし、そのほかの1, 2, 4, 5の項目は総じて全体よりやや小さな値である。ICTを利用して論文を検索している可能性もあるが、2(図書館、PC教室の施設)や4(教科書以外の関連書籍や文献)のような、より信頼のおける文献に触れる機会をより増やしたいという感想をもった。
- PCやスマホなどのICTを利用した調べ学修が全体よりも高いようだ。学部の特性と合致しているものの、どの程度のことを調べているのかが気になる(単に検索をす

授業アンケートの活用

るだけなのか、専門的な内容を含むようなwebサイトを閲覧しているのか)。

- 関連書籍や文献を読むことが全体よりも低くなかったことが意外であった。ただし大学全体として低調であるようなので、もう少し書籍や文献を読んで学修できるような工夫が必要なのかもしれない。

Q18 (知識、スキルの獲得の程度) について

- 「非常に得られた」の回答が全体と比較して10%程小さいものの、全体的にみると全体と学部での平均値の差は0.2と大きく離れていないこと、そして「やや得られた」「非常に得られた」の回答を併せて8割を越えており、概ね知識やスキルが得られたと回答してもらっていると考える。あまり得られていない、まったく得られていないと回答した5.1%の学生(全体は3.4%)の学生は、より向学心があり、レベルの高い内容を扱って欲しいという意味であることに期待したいが、どういった意味で知識やスキルが得られなかったのか、確認してみたいと考えた。

【メディア表現学科】

7月教授会の学部としてのFD活動の準備として、メディア表現学科での意見交換を行った。

- ①2021年度秋学期における学生の学修時間・学修行動などを通じた、教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果
- ②次期に向けた課題(授業方法の改善、教育課程の改善など)
- 意見交換の結果を報告書として学科長がまとめ、点検評価委員会に提出する。

以下、質問項目ごとに議論の結果を報告する。

Q5 この授業のために、平均すると授業1回あたりどの程度授業時間外に学修しましたか。

回答では、授業時間外の学習時間が長いという結果が出ている。

その理由を考察すると、以下の要因によって授業時間外学修時間が上乘せされていると考えられる。

- 制作系の科目(スタジオや画像編集ソフトやDTPを用い

るような)では授業時間外に多くの時間を費やす必要があること。

- 社会調査系の科目についても、調査の実査及び分析は授業時間外に行う必要がある(これらは秋学期に行う作業となる)
- ゼミでは、授業時間外での学修・活動がかなり多いこと。
例 地方自治体との連携活動
- 講義科目についても長い予習・復習の時間が必要なものがあること。

Q6 この授業での学修に意欲的に取り組みましたか。

全体と比べ情報学部生の結果との間に大きな差はみられなかったため、特に意見なし。

Q7 この授業の内容の理解を深めるために、主体的に行ったことはありますか。(複数回答可)

- 回答結果からはICT利用の学習を行っている学生が多いことがうかがわれる。
- それに関して、教務委員から、成績不振で面接を行った学生がPC教室で課題を行っている中で一緒に作業をする仲間を見つけることができ、また、学修の良いサイクルができたという事例が報告された。このように、学修に取り組める「場所」がキャンパスにあるということは、よい効果をもたらしていると思われる。
- 書籍など一見アナログ的なメディアと見られがちなものも、図書館でのデータベース検索など、デジタルな面が関係していることには、結果の解釈において留意すべきである。
- 設問にある「ICT 利用」には、単純なキーワード検索から高度な利活用まで幅広い範囲が含まれる。どのように/どの程度の利用がなされているのか、一步踏み込んで使用実態を知ることができるとよい。

Q18 この授業で、知識・スキルがどの程度得られましたか。

- 5と4の項目の合わせた割合は全体よりも3.1%小さい結果となっているが、全体とほぼ同等と考えてよい。回答として、知識・スキルが「非常に得られた」を選択する

授業アンケートの活用

ことをためらい、「やや得られた」を選択するという評価態度が影響して可能性もある。

その他

- オンライン授業について: コロナ禍収束後も、座学系の科目や大教室授業になるもの等は、オンライン授業を選択肢として残したほうがよい。
- 「社会学概論」(必修)は、オンデマンド型教材による授業であるが、教室でもコンテンツを上映して、そこに参加してもよい形をとっている、学修を週一度、定期的にしたほうがよい学生もいるため、一定の効果があつた。また、教室に来て質問をする学生を見ていると、コロナ禍で、学生のコミュニケーション欲求が高くなっているのではないかとも思われる。

- 同じく「社会学概論」(必修)では、学生に勉学の習慣をつけさせる工夫をしているという報告があつた。推薦入試と学力入試以外の入学者が増えているため、学習習慣の確立が課題と考えるためである。定期試験も重厚なものを用意するなどしている。

②次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

上記通り、情報学部においては、授業方法、教育課程のいずれにおいても総論的問題は見いだせず、個別の問題については内部質保証会議の機能内において解決されている。変化の急速な分野を担う学部として、学位授与方針の適切な確認と、それに伴う教育課程編成方針の確認に、引き続き取り組んでゆく。

健康栄養学部

2021年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

実施結果の概要

Q5~7について以下の通り検討方針を決め、全体結果と個々の結果を比較しながら、各自で専用のシートにまとめて提出した。そのシートをサーバー上に上げて全員が閲覧可能な状態にし、自分以外の教員の取り組みについて把握することとした。紙媒体でもファイルに綴じて学部事務室で一定期間公開し、閲覧後に捺印することで参加を確認した。

【検討方針】

Q5. この授業のために、平均すると授業1回あたりどの程度授業時間外に学修しましたか。

Q7. この授業の内容理解を深めるために、主体的に行ったことはありますか。

*上記Q5, 7は Q6.この授業での学修に意欲的に取り組みましたか とも関係が深いと思われる。すなわち、学生の意欲的な取り組みの表現型として授業外学修や主体的な行動をとらえることができる。そこで、今回のFDでは、上記の設問に関して以下の①②を回答シートに記入してもらった。

①「学生に適切な(適度な)授業外学修を促す(Q.5に関連)」あるいは「学生が意欲的に学修に取り組むように促す(Q.6に関連)」ための授業内外の取り組みや改善すべき

点などについてご自身の授業アンケートを振り返りつつ記入してください。

②学生のQ7への回答についてご自身のお考え(印象・感想などでも可)を記入してください。その際、可能であればご自身の取り組み(①記入)に対する学生の応答として回答を検討してください。

【各教員の検討結果の概要①】

授業内外の課題設定の難しさを感じているという意見が多かった。特に授業への取り組みが国家試験へも反映されることを考えると、質と量の兼ね合いに難しさを感じるようである。コロナ禍においてオンデマンド授業やmanabaの利用が進んだことで、課外の学習や予習・復習にmanabaの機能や録画授業を活用する取り組みも複数みられた。レポートの指導に力をいれている教員も複数おり、学生のレポートへの取り組みに効果を見せているようである。

様々な取り組みに対してクラス間での差や個々の学生においても意欲的な学生とそうでない学生の二極化に悩む声も多かった。教員の熱意や授業の意図が届かない学生への対応の難しさが浮き彫りになった。授業によってグループワークを行う場合もあるが、その際の促しや評価の難しさを指摘する意見もあった。

授業アンケートの活用

【各教員の検討結果の概要②】

学生の回答の中で、ICT利用が多くなっていることを危惧する意見が複数みられた。具体的には実体験を伴う主体的な考察や、図書館(書籍)の利用を勧めたい意見があった。図書館利用については、授業内で図書館利用の時間をつくることや、レポートの参考文献に使えるネット情報(サイト)を限定することで書籍の利用を促すなど、対策を講じて奏功している事例もみられた。

予習・復習に関しては、課題量が多いことで学生間の協力が増えていると感じる意見、予習の必要性を痛感させる授業展開により予復習の時間が増えていると思われる事例、将来的な必要性を伝えることで主体的な学びにつなげている事例などがあつた。

また、自己の振り返り(反省)として、漢字にフリガナをつける工夫が欠けていた、小テストを主に取り入れたが間にレポートを入れた方がよかったかもしれないという意見もあつた。

た。

主体的な学びを促す仕掛け作りは難しいと感じる意見は多く、この検討においても学生の温度差・二極化を危惧する声があつた。仕掛けに気づく学生と気づかない学生がいる中で学生のレベルに合わせた授業内容や難易度設定の必要性を感じているという意見があつた。また教職関係では、免許を取りたいが教員になるつもりがない学生が積極的に授業参加できる方法を模索することが今後の課題とする意見があつた。

その他、ゲストスピーカーを授業に呼ぶことを計画しているという回答もあつた。

アンケートの設問に関して「実習科目の場合、授業(実習)への取り組みへの回答なのか、その後のレポートへの取り組みへの回答なのか」回答者の認識が一致しない可能性のある設問となっていたと指摘する意見があつた。

国際学部

2021年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

① 2021年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

最初に、国際学部教育研究推進センター主任の山崎先生より、「2021年度秋学期授業アンケート」のうち、国際学部の専門科目に関するQ5(授業1回あたり授業時間外の学修時間)、Q6(授業の学修に意欲的に取り組んだか)、Q7(授業内容の理解を深めるために主体的に行ったこと)、Q18(授業で知識・スキルがどの程度得られたか)の4つの質問のアンケート結果についての説明があつた。

これらに対して以下のような質問や意見が出された。

- 大学設置基準では1回の授業につき4時間の学修時間を確保するよう教員が指導することになっているが、アンケート結果はそれとはほど遠い。アンケート結果について教育研究推進センターではどのように考えているのか。
- アンケート解答率が18%なので、勉強を一生懸命している学生が答えている(結果が上振れしている)可能性がある。
- 1日3~4コマの履修では12時間以上を学修に充てることになり、現実的には無理ではないか。
- 果たして教員が1コマの準備に4時間をかけているだろ

うか。学生に4時間学修させるのであれば、教員はその倍の時間を勉強する必要があるだろう。

- 単位の実質化を目的に1セメスターの単位取得上限を22単位から20単位に下げたのに、学修時間が1時間以下の割合が多いのは問題である。コマ数を詰めすぎず、予習・復習をしっかりとやるのが望ましい。

②次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

次期に向けた課題について、第一にアンケートの回答率の低さ(18%)が挙げられる。回答率を上げるためには、以前のような紙ベースによる授業内での実施に戻したらどうかとの意見も出されたが、配布回収の手間暇やコロナ感染対策を考えると現実的ではない。したがって、現行のweb上でのアンケート実施を前提としつつ、回答率を上げるための施策の検討が必要である。

第二に、学修時間を問う設問そのものに対する疑問も出された。具体的には、学生が何時間勉強したかではなく、どれほど興味を持って知的刺激を受けたかが大切であり、学修時間だけが独り歩きしないような議論をすべきとの意

授業アンケートの活用

見であった。意見交換の中でも、1コマ4時間の学修時間を学生に課すことへの疑問の声や、何かしら課題を出さなくても自主的に勉強しないと授業についていけないような授業

展開も可能ではないかとの意見もあり、学生に自発的な学修となるような授業内容や課題の与え方が求められよう。

経営学部

2021年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動

① 2021年度教育活動の振り返り、アンケートの結果に関する考察、意見交換の結果

教育研究推進センター主任から、アンケート結果について説明があり、経営学部の教育活動が全体として良好な状況にあることが示された。学部長から、少人数教育の実現状況について説明があり、受講生数の過多と過少が、現行カリキュラムの進行のなかで、どのように変化するか見守る必要性が示された。

アンケートの結果をみると、「授業1回当たり、どの程度時間外学修をしたか(Q5)」の質問について、「2時間以上・15.8%」「1時間30分程度・18.0%」と答えていて、学生3人中1人が1時間30分以上の授業時間外学修に取り組んでいた。これは学生達の履修科目数やアルバイトなどによる物理的な状況を勘案すると、ほとんど学修していなかった学生が4.2%いるが、全体として授業外学修に努力していたといえる。なおかつ、この集計値は、「大学全体の平均値」や「情報学部を除いた他学部の集計値」を上回っていて、前年同期の「2時間以上・12.3%」「1時間30分程度・4.2%」「1時間30分以上の合計値・16.5%」を大きく上回っているため、授業に取り組む姿勢がかなり改善されていて望ましい方向にあるといえる。

「学修に意欲的に取り組んだか(Q6)」の質問については、「非常に・48.8%」「やや・40.2%」で9割弱の学生達が意欲的に取り組んでいると回答し、他学部より高い集計値を示して、前年同期(86.3%)よりも改善されていた。

「授業内容の理解を深めるために、何を主体的に行ったか(Q7)」の質問については、「予習・復習や関連する活動に取り組んだ・47.0%」「教科書以外の関連書籍や論文を読んで学修した・24.9%」と回答されていて、数値が十分高いとはいえないものの、大学全体(40.8%, 20.6%)、前年同期(42.9%, 20.2%)より良い集計値となり、学生達の学修方法は望ましい方向にあると考えられる。

その反面、「PCやスマートフォンなどのICTを利用して調

べて学修した・52.2%」「友人と協力しながら学修した・31.8%」の項目においては、数値自体は他の質問項目より高く大学全体の平均値よりも高いが、前年同期(65.5%, 42.9%)よりは下がっていて望ましい状況であるとはいえない。今後の情報化社会のさらなる進展、学部の特性などを考えると、注意深くその対応策を検討すべきであると考えられる。

「シラバスにある授業の達成目標を、あなたは十分達成できたと思うか(Q8)」の質問について、平均値・4.2、「非常に・33.5%」「やや・49.8%」で8割強の学生が達成できたと回答している。これは前年同期の平均値・3.7、達成できた・66.7%より改善されていて、大学全体や他学部よりも高い集計値である。そして、「学問や研究への興味・意欲がどの程度得られたか(Q20)」の質問についても、「非常に・45.3%」「やや・41.1%」の計86.4%の学生達が得られたと回答している。これは前年同期の平均値・3.7、達成できた・61.9%より改善されていて、大学全体や他学部よりも高い集計値である。

したがって、経営学部の場合、全般的に学生達の学修時間や学修行動についてかなりの改善がみられていて、学部としての学修への取り組みは良好な状況にあると考えられる。但し、アンケート調査の回答率の低さの問題がある。前年同期の回答率を上回ったとはいえまだ低く、経営学部の状況を正しく理解するためには回答率を上げる必要があると考える。

② 次期に向けた課題

(授業方法の改善、教育課程の改善など)

田中准教授から、担当授業の進め方や工夫等が報告された。参考となる点が多かった。本研修会後にメールにて、対面授業とオンライン授業の融合は教育効果が高いとの指摘があった。

今回のアンケート調査の結果をみる限り、引き続き「担任

授業アンケートの活用

制度とゼミ指導教授を活用した教員間の情報交換とそれによる学生指導」と「学生と教員間の双方向コミュニケーションの活性化」、そして、「教員間のオンライン授業のスキ

ルやノウハウの共有、授業へのフィードバック」も積極的に進めることが、学生達の学修に良い影響を与えらる。

本学におけるFD・SD（2022年度）

開催時期	内容	主催
4月9日	新任教員研修	学長室
4月19日	学習成果の評価における試験的なルーブリック導入の経過報告	情報学部
4月19日	2022年度コンピテンシー評価と学習成果の把握について	健康栄養学部
5月19日	PROGテスト結果の分析・解説	文学部
6月15日	在学研修報告： 現代人におけるウェルネスライフが精神的健康に及ぼす効果 —沖縄と本土の比較調査研究—	人間科学部
7月13日	事例から今必要な学生支援を学ぶ	学生委員会・保健センター
7月13日	ルーブリック評価に関するFD研修会	教育学研究科
7月	2021年度秋学期授業アンケート結果を利用したFD活動	各学部
11月16日	基礎演習のこれまで —教員養成学部での初年次教育あり方と展開—	教育学部
11月30日	さまざまなICTツールの効果的な活用と授業改善	教育研究推進センター
12月15日～	令和4年度 ハラスメント防止研修	ハラスメント防止委員会
2月16日	障害のある学生の修学支援に関するFD研修会	教育学部
2月16日	2022年度「知のリテラシー」授業報告	経営学部
3月7日	就職活動の現状と今後の学生支援	就職委員会・キャリア支援部
3月7日	戦後教員養成制度の原則と最近の教員養成改革について	教育学部
3月16日	学習成果の評価指標に関するFD研修会	国際学部・国際学研究科

本学におけるFD・SD(2022年度)

事務職員を対象とした研修

開催時期	内容	主催
4月～6月	新任職員研修： 学園の歴史、中長期計画ほか	文教大学学園ほか
4月25日	新任管理職研修： 人事考課、労務管理ほか	文教大学学園
5月～翌年1月	採用2年目研修： 教育関連法令、教務事務基礎ほか	文教大学学園ほか
5月～翌年1月	採用3年目研修： 学校法人会計、私学助成ほか	文教大学学園ほか
5月	入試アドバイザー研修	入試部
6月～翌年2月	採用5年目研修： 学園人事制度ほか	文教大学学園ほか
7月～10月	係長実践研修	日本能率協会
7月～12月	採用7年目研修：ビジネスコーチング	日本能率協会
7月～12月	採用8年目研修：チームビルディング	日本能率協会
8月24日	管理職研修： 考課の意義とポイント、考課面談ほか	文教大学学園
9月	課長実践研修	日本能率協会
11月10日	管理職が押さえるべき労働基準法の基本セミナー	日本能率協会
12月13日	採用10年目研修： キャリアの振り返りほか	文教大学学園